FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

京の街に"バス停"ならぬ"バス・ストップ・シェルター"。

第11回全国都市緑化きょうとフェアにて登場した、新しいスタイルの停留所

写真／内藤貞保　ライター／木村紀子

京都の情景に合わせ、都市広告メディアとしても機能させるのが目的。

こちらが本家のバス・ストップ。

『バス・ストップ』と聞いて、まず何が思い浮かぶだろう。古くはマリリン・モンローの純情恋物語か、それとも浅野ゆう子の幻の名曲(!?)『セクシーバスストップ』であろうか（十分古いなこれも）。いずれにせよ、映画や歌謡曲で頻繁に目にする出会いと別れのドラマがある場所、それがバス・ストップである。しかし、この場合のバス・ストップとは、決して我々が普段言うところの"バス停"ではない。あくまでも"バス・ストップ"。たとえ違和感があろうとも、カッコいいほうがいいもん、てな訳だ。そんなドラマに出てきそうなバス・ストップが先日、京都の街角に登場した。日本のバス停留所と異なるデザインは、正確には"バス・ストップ・シェルター"と呼ばれる。ご覧の通り横壁全面が広告になっているがこれを『サイン・システム』といい、海外では結構好評らしい。このバス・ストップ・シェルターが京都に期間限定で取り付けられたのは、"第1回全国都市緑化きょうとフェア・緑いきいき京都94"の一環として、11月20日まで梅小路メインゲート前に設置されていた。停留所としての機能に、メディア効果と都市の景観美を融合させたこの画期的なアイデアは、そのルックス以上に思わぬ力を発揮する。まず電飾看板であることからまわりが明るく、夜は段違いの好印象だということ。また強化ガラスを使用しているので、安全性も高いということ。そんなプラス面の多さから、設置期間中にはかなりの注目を集めたようだ。現在は期間終了のため、その姿はない。だが今回話題を呼んだこの停留所、京都をもっと面白くしたいと願う者としては、近い将来、普及実現化の可能性に期待を持ちたい。こんなバス・ストップ・シェルターなら、より幾つものドラマが、この京の街に生まれそうな気がするのだが。

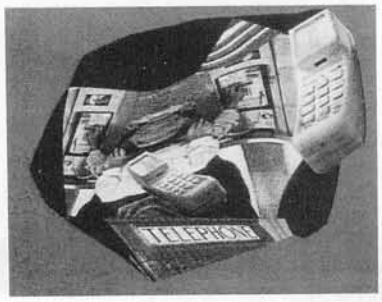
FAME Report

京都ノゾキ見トピックス

いのちの電話、新事情。

7割も増加した「死にたい」。悩める京都人の実態とは。

現代は「いつでも、どこでも、誰とでも」話すのが可能な時代である。コギャル達は制服にポケベルを忍ばせ、たとえ相手がどこにいようと、会いたくなれば容赦なくベルを鳴らして「私が呼んでま～す」とばかりに自己主張。サラリーマン達は携帯電話を小脇に抱え、交差点でも電車の中でも「ボクってこんなに忙しいヒトなの」とでも言いたげに、不必要な大声を張り上げる。現代のコミュニケーションに、もはや不在という文字はないらしい。しかしいくら便利になったとはいえ、本当の意味でのコミュニケーションにはまだまだ程遠いのではないかと思わせる、あるデータが発表された。これは、自殺の予防を目指して悩みごとや相談を受けつけている『京都いのちの電話』が、このほど過去8年間の相談状況をまとめた結果である。いのちの電話といえば誰でもその名を聞いたことがあるだろうが、実際にかけたことがあるとなると少ないかもしれない。しかし、研修を受けたカウンセラーが24時間体制で待機するこの相談室では、一晩中、途切れることなく電話の音が鳴り響いている。今回発表されたのは1986年から1993年までの結果記録。世の中の流れに沿うように、電話相談の状況にも大きな変化が現われていることには驚かされる。まず全体の相談件数でみると、この8年間で約13万2千本。昨年だけでも2万千本、減ることはなく、年々増え続けているのが現状だ。コミュニケーションがより手軽になったこの時代でさえ、自分の周囲に救いを得るより、電話の向こうの未知の人間に助けを求めるという手段は廃れるどころか、増え続けているのである。男女別にみてみると、常に女性が数的に多かったが昨年で逆転。女性304人に比べて男性372人と、今や悩める男性諸君がわずかに多い。そしてもうひとつの大きな特徴としては、91年までトップを占めていた青少年の異性に対する悩みごとが減少し、かわって人生に対する悩みごとが増えているということである。男性なら進路関係や今後の生き方、女性なら夫や姑との人間関係問題が増加している。今の若者は恋愛の存在価値を軽くみるのか、それとも人生観により重きを置くようになったのだろうか。そのへんは不明だが、「セックスレス」だとか「生き方に迷うXジェネレーション」だとか言われている現代の若者事情を反映している結果といえそうである。そんな若者達に代わって、逆に増加しているのが中高年からの相談であるという。内容的には、心に病を持ち「死にたい」と感じて電話に手をのばす人々が目立ち、86年の402件から昨年には676件と七割のアップ。最近の傾向としては、病気などの健康問題や保険医療に関する疑問・不安、そしてエイズへの恐怖を訴えるものが特に多いとのことである。京都いのちの電話では、「男性の相談が増えたということは、彼らが見ず知らずの人間に悩みを打ち明けることに抵抗を持たなくなってきたのではないか」ととらえている。果たしてそれがよいことなのか、淋しいことなのかは、一概に判断できない。「いつでもどこでも、誰とでも」話せるこの時代。だがそれは「なんでも」話せるということとは意味が違うのである。今日もまた電話は鳴り続け、その向こうには誰かに打ち明けたくて苦悩する人々が存在する。この相談室から電話の音が止む、そんな日はいつか、訪れるのだろうか。



◆いのちの電話
☎075（864）4343